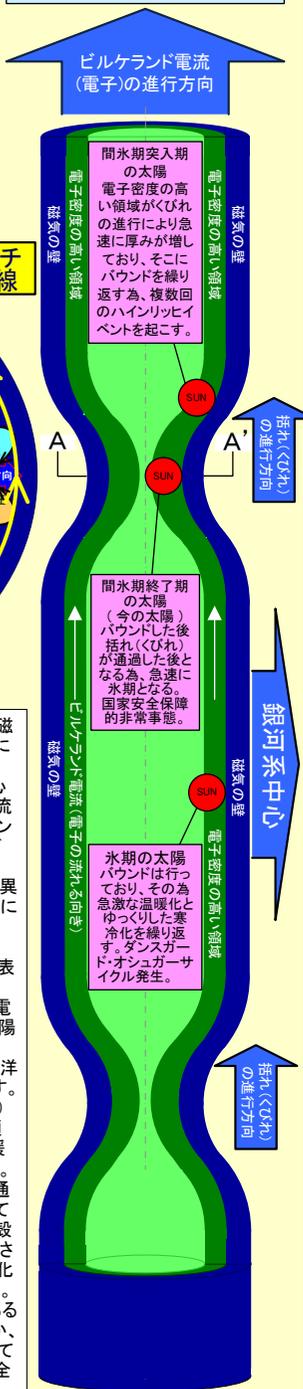


# プラズマ宇宙論による氷期・間氷期・小氷期生成説

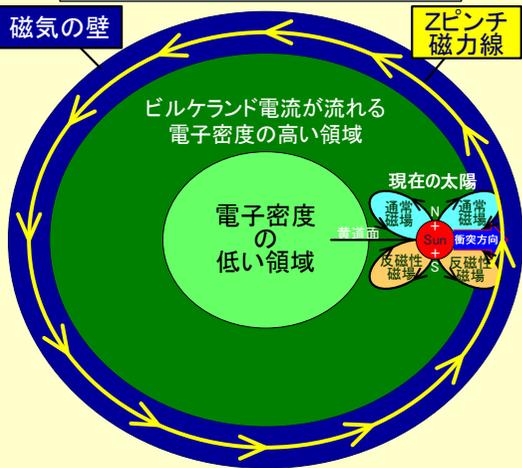
## プラズマフィラメントの「くびれ」原因仮説

銀河中心核の巨大ブラックホールの働きでできたハドロン粒子の膠着円盤が巨大な発電機となり電子ジェットを銀河中心核から銀河面の鉛直方向へ噴出させています。その結果、銀河周辺から銀河中心核へ向かう電子の流れビルケランド電流が生じるのです。銀河中心核へ流れるビルケランド電流（電子の流れ）は電流の磁気作用（Zピンチ）によって銀河プラズマフィラメントを多数形成します。このZピンチでできた銀河プラズマフィラメントには所々に挟れ（くびれ）があって銀河中心核の方向に進行しているのです。

## 銀河プラズマフィラメント 銀河面平行断面図



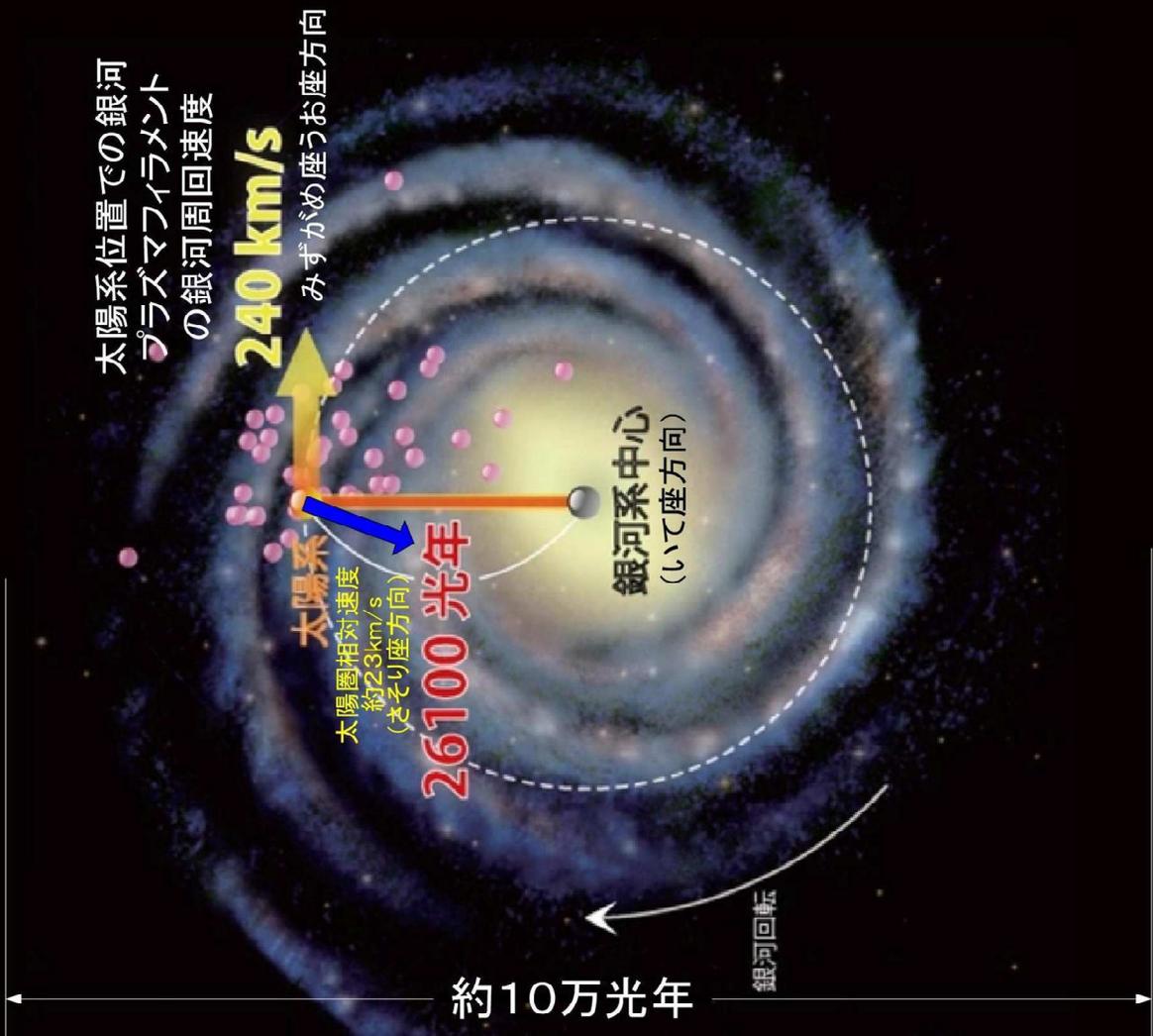
## 銀河プラズマフィラメント「くびれ部」 銀河面垂直断面図(A-A')



銀河周辺から銀河中心核へ流れるビルケランド電流は電流の磁気作用（Zピンチ）によって磁気の高領域を生じます。この磁気の高領域によって銀河プラズマのフィラメント構造が形成されているのです。銀河プラズマフィラメントは数万光年の弧を描きながら銀河中心核に電磁気結合して銀河系を周回しています。ビルケランド電流によるZピンチのプラズマ圧縮作用によって銀河プラズマフィラメントの内部では太陽などの恒星が多数誕生します。この太陽などの恒星は銀河系と重力結合して銀河系を周回しているのです。銀河中心核に磁気結合した周回運動と重力による周回運動が異なるため、反磁性体である太陽などの恒星は周期的に磁気の高領域に衝突してバンドするのです。その時が小氷期やダンスガード・オシュガーイベントなのです。ところで、銀河プラズマフィラメントを流れるビルケランド電流は表皮効果によって主にプラズマフィラメントの表層を流れています。その結果銀河プラズマフィラメントの磁気の高領域のすぐ内側には電子密度の高い領域ができるのです。電子密度の高い領域に太陽系が遭遇すると磁気圏のバンアレン帯に電子や陽子が多く蓄積し、地球に荷電粒子が多く降り注ぐため大気電流、地殻電流、海洋電流が流れてジュール熱の作用で地球気候は温暖化するのです。間氷期とは銀河プラズマフィラメントの磁気の高領域の挟れ（くびれ）が進行してきて太陽系付近を通過するために電子密度の高い領域に太陽系が遭遇するときなのです。その結果、間氷期は温暖な気候となるのです。しかし小氷期ではそうではなくなるのです。小氷期の突入直前では太陽系が電子密度の特により高い領域を通過する為に、地球に大量の荷電粒子が降り注ぎ、それが原因で大気電流が地球熱圏を吹き飛ばし異常気象を発生させたり、地殻電流が地殻コンデンサーの大規模破壊を起こし大地震を発生させたり、海洋電流が海洋過熱を促進して海洋温暖化、海洋酸性化を起こしたりするのです。それが今現在の地球の状況なのです。今現在とは貞観期やマウンダー期同様の小氷期の突入期であることはほぼまちがいがありません。この小氷期を如何に生き抜くか、そしていずれ訪れる本格的氷期を如何に生き抜くかが今問われているのです。今こそ、科学者・技術者・知識人は事態が国家安全保障に関わると認識し、対策を世に提案しなければなりません。

Assorted by Birkenland II 2014/07/22

## 銀河系を水平方向から見た様子(想像図)



## 銀河系を垂直方向から見た様子(想像図)

